

---

# ハイキング同好会！

ざらめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハイキング同好会！

### 【コード】

N1448P

### 【作者名】

ざらめ

### 【あらすじ】

この小説に書かれているのは、私、山江翠が体験した、ちょっと怖くて、すごくだキドキした、2日間の話です。

## 小説を読む前に

### 登場人物紹介

山江翠：峰川中1年。ハイキング同好会のメンバー。植物に詳しく、優しい性格。京介が好き。

枝野京介：峰川中3年。ハイキング同好会の会長。行動力と思いやりがある。

和田英美：峰川中1年。ハイキング同好会の書記。美人だが、嫉妬深く、翠をライバル視している。京介が好き。

滝沢陸杜：峰川中1年。ハイキング同好会のメンバー。ぼつちやり体型で、方向音痴。

湯本大河：峰川中2年。ハイキング同好会のメンバー。熱血漢だが、涙もろい。

植村秋：峰川中2年。ハイキング同好会の副会長。いつも冷静沈着だが、キノコの事になると、口が止まらなくなる。

### 設定

上記の6人は、峰川中学校のハイキング同好会のメンバーです。ハイキング同好会は、毎週火曜日と木曜日の放課後、ハイキングについて（野生動物に遭った時の対処方など）学びます。そして毎月最後の週の日曜日には、どこかへハイキングに行き、日々の学習の成果を発揮します。

## 真っ赤な私と冷たい視線

(ガタン)

泉駅発、若葉山行き of 電車の車体が揺れた。

「キヤ！」

私はバランスを崩し、京介先輩の肩に、寄りかかるような姿勢になつてしまった。

「おっと、翠君、大丈夫？」

京介先輩の真っ直ぐな瞳が心配そうに私を見つめた。

「は、はい！ すいません……。」

私は、もじもじしながら応えた。顔は真っ赤だった事だろう。はずかしいのもあるけど、それより嬉しかった。先輩が私を心配してくれたことが。先輩には、ちょっと肩が触れただけで、ドキドキしてしまう。尊敬しているという事もあるが、やはり本当の理由は……。

考えるのに夢中で、私は気付かなかつた。私を冷たく睨む、一對の切れ長の目があつた事に。

## 四色の景色（前書き）

11月という設定です。

## 四色の景色

私達は、泉駅11時発、若葉山行きの電車に乗っていた。

若葉山は、11月のハイキングをする山で、紅葉の美しさで評判だ。コースは、大人用のAコース、子供用のBコース、シニア用のCコースの内のAコースで、野生動物を見られる事もある。山頂に登ったあと、麓の白樺湖から、15時30分発の駅までのバスに乗る予定だった。あんな事が起こらなければ……。

「あつ！若葉山だー！」

滝沢君が窓の外を指差した。雲一つない青空に、若草色や紅色、橙色が映えて、とても綺麗だった。

「そろそろ到着ね」。本当にキレイ……。」

和田さんが言いかけた時、電車はトンネルに入った。

## 湯本先輩の予言

若葉山に着くと、湯本先輩が大きく両手を振り上げて叫んだ。

「着いたぞー！今日も、一生の思い出に残る日にしようー！」

大袈裟だなあと皆思った事だろう。今から思えば、それは本当の事だったか・・・。

「山に入る前でもこんなに空気が綺麗なんてさすがね。キノコもいっぱいありそう。？」

植村先輩もうつとりしてつぶやく。

「みんな、自分の世界に浸らずに、そろそろ出発しようか。」

京介先輩が言うと、皆自分の世界から戻って来た。

「じゃあ、出発！」

## 遭難の始まり

「はあ。」

私は、京介先輩の隣で、嬉しさ、さびしさ、心配が1:2:2位の割合でできている溜息を漏らしていた。理由は・・・遡ること1時間前のこと。

「あれ？」

植村先輩が、辺りを見回しながら言った。

「どうかした？」

京介先輩が真つ先に声をかけた。

「滝沢君が、いない気がするんだけど・・・。」

「・・・あつ、そう言えば・・・。」

「もう、滝沢君って、図体は大きい癖に影薄いのよね。」

「まあまあ、そんなこと言ったら滝沢君が可哀想じゃない、和田さん。」

「山江……！！俺は感動した？お前の友を思いやる心に？青春を感じる……！！！」

「（（湯本君／先輩、あつ・・・））」

「と、とりあえず、探そうか。」

京介先輩が、苦笑いをしながら言った。

「じゃあ、私、湯本君、和田さんと、会長、山江さんで分かれようか。」

植村先輩の言葉に、私は顔を輝かせ、和田さんは私を睨んでいた。

「1時間後に、この切株の前に戻ってこよう。その頃には見つかるだろうし。」

京介先輩に従い、私達は分かれた。

「滝沢くん！」



「いるなら返事してー!」

「見当たりませんね・・・。」

「ああ、全然。あつちのグループが見付けてるかもしれない。時間も丁度良いし、そろそろ戻ろう。」

「つて、どつちに?」

「え、えーっと・・・どつちだったかなあ。」

「も、もしかして、先輩・・・方向音痴!?」

「そ、そうだけど・・・。」

先輩は、蚊の鳴く様な声で言った。

「翠 君こそ、覚えてないの?」

「はい!私、生粋の方向音痴です!」

「そこまで堂々と言うもんじゃないと思うけど・・・ま、まあ、あの切株を探せば良いことだし・・・。」

「どんな切株でしたっけ?」

「えーっと、キノコが生えてた気がするけど・・・どんなのだったっけ?」

「私、キノコには、あんまり詳しくないですよ。あつちのグループは、植村先輩がいるから大丈夫だろうけど。」

「はあく。」

そして、今に至るわけだ。

## 搜索者の誤解

「そろそろ日暮れですね。」

「うん。空が綺麗だ……。僕は、こういう色、好きだな。」

「私もです。でも、方角はわかっているのに動けないなんて、歯がゆ過ぎ……。」

私達はかれこれ30分程、こうして座っている。

（（これから、どうしよう……））

そんな思いが2人の心を支配していた。

が、その時。

ガサゴソ　ガサゴソ

後ろの叢から、不穏な音が聞こえ、私は身を固めた。振り向くと、草の間から、茶色が見えた。

「キヤー！く、熊ー！ー！！！」

私は思わず、京介先輩の手をつかんで走り出していた。

「ちょ、ちよつと、翠君!？」

先輩のそんな声が聞こえたような気がしたが、私の足は止まらなかった。

2人が夕日を見ていた頃

「センパイ、どこですかー、京介センパイ!」

英美達は分かれて、待ち合わせ場所にやって来なかった京介と翠を探していた。

「はあ、全く、どこ行っちゃったのかしら。」

英美は、葉っぱの付いてしまった、自分のダークブラウンのコートを払いながら、溜息をついた。

「山江さんはともかく、京介先輩だけでも見付け出さなくちゃ!でも、ちよつと休もう。」

英美は、その場でしゃがみこんだ。

「……綺麗だ……好きだな……。」

「……私もです……。」

英美は、途切れ途切れに、京介と翠の声が聞こえたように感じて、顔を上げた。会話の内容や、京介の、いつもよりも低く、優しげな声が耳にこびりついた。

英美は、声が聞こえてきた目の前の叢の、反対側に出ようと、叢に潜り込んだ。その時。

「キヤー！」

耳をつんざくような悲鳴がして、英美は止まった。しかし、またすぐに動いて、叢を出た。だがそこに2人の姿はなく、遠くに手を繋いで走って行く姿が見えた。

（やだ、あの人、どさくさに紛れて手なんか繋いじゃって！見なかったことにしよう。餓え死にするにしても、山江さんの方が絶対先だし。）

英美はまた、平然と歩き始めた。

## 涙と陽だまり

「はあ、はあ、ここまで来れば、大丈夫ですよ、先輩。」

「う、うん。そうだね・・・それにしても、翠君、足速かったんだね、びっくりしたよ。」

「そうでした？必死だったからかも・・・でも、さらに変なところに来ちゃいましたね。」

辺りはすでに薄暗く、高い木が生い茂っていて、人が来そうには思えなかった。

「今日は、野宿だな・・・。」

「そうですね・・・はあ。」

私は、大きな溜息をついた。

「まあ、そう暗くなるなよ！」

京介先輩は微笑みながらそう言っつて、私の肩を叩いた。

「実技演習の、良い訓練じゃないか！」

「はい！」

先輩の笑顔は、暗闇の中で、明るく輝いていた。

### 2時間後

「習ったことを使って、こんなにたくさんのができるんですね！ホント、すごい！」

「翠君の植物の知識もすごいよ。食べられる野草がこんなにあるなんて！今度、同好会でも勉強しよう！」

「あ・・・。」

私の口からは、自然にそんな音が漏れていた。

「どうしたの？」

京介先輩が私の顔を覗き込む。

「明日、学校だなんて思って・・・帰れるのかなって思ったら・・・」

。  
「京介先輩の整った顔が、滲んで見えた。」

「大丈夫だよ……。」

(あ……)

京介先輩は、私を抱きしめていた。

「絶対に、僕が、命に替えても君を連れ帰る。だから、泣かないで。」

「京介先輩の腕の中は、春の陽だまりの様に温かった。」

## イメージ通りの朝ご飯

目が覚めると、空は絵の具で塗った様に雲一つあらず、周りでは、小鳥が可愛らしく鳴いていた。これで朝ご飯がフルーツの盛り合わせとかなら良いんだけど・・・遭難中にそんなことは有り得ない、か。

私は昨夜のことを思い出し、もう一度目を閉じた。

確か、京介先輩に抱きしめられて安心して・・・そのまま眠り込んでしまった様だ。

私は目を開けて起き上がった。地面の上で眠ったからか、体の節々が痛い。

「おはよう！よく眠れた？」

「あ、おはようございます、先輩！」

先輩は後ろ手に何かを抱えていた。

「あの・・・先輩、何を持ってるんですか？」

「うん、これはね・・・ジャーン！」

先輩はそう言って、手を前に出した。

それは、フルーツの詰まった袋だった。

「わあ〜すごい！リンゴにブドウに・・・どうしたんですか？これ・・・。」

「僕、翠君より先に目が覚めたから、朝食の調達に行ったんだ。もし毒がある物があったら大変だから、翠君に見てもらおうと思って、起きるのを待ってたんだよ。」

京介先輩は得意気に笑った。その笑顔は、いたずらに成功して喜んでいる子供の様に、人懐っこく、輝いていた。

「見た限り、毒があるのは無さそうですね・・・。」

「よかった。じゃあ、ナイフが必要だね。」

先輩は、少し離れたところに置いてある荷物から折りたたみ式のナイフを取った。荷物のそばには少し凹みがあった。

先輩、あそこで寝たのかな・・・ちよつと私から離れて・・・そう  
いえば、真夏の夜の夢にもこんな場面あったな・・・。  
私はそんなことを思いながら、先輩と、イメージ通りの朝食を食べ  
た。

## 恋敵の憂鬱

(とうとう夜が明けちゃった……。)

英美は、若葉山近くの民宿の窓に寄りかかり、ため息をついていた。結局日が暮れても京介と翠は見つからず、英美達は学校に連絡して民宿に泊まったのだ。夜が明けたので校長や京介、翠の親も来ている。警察も数名動員した捜索は、午前8時から始まる。

(朝になっても見つからないのなら、あの時大声で呼び止めればよかったわ。もし京介先輩が助からなかったり、一生山江さんを恨んでやる！)

八つ当たりをしながらも、英美の目は2人を探して窓の外を向いていた。



## 遭難の終わり

搜索はあまり難航しなかった。なぜなら、私達が朝食後も、その少し開けた野原を離れなかったからだ。（離れなかった、というより、離れられなかった、かもしれない。その証拠に、私達は、午前8時28分、少しお腹を膨らませ、スヤスヤと寝息をたてた状態で発見されている。）

他のみんながいる民宿に戻った時、私に最初に駆け寄ったのは、意外にも和田さんだった。

「山江さん、京介先輩に変な植物食べさせたり、危険な目に合わせたり、怪我させたり、してないでしょうね?!」

和田さんは、怒る様な口調で私に話しかけた。

「う、うん。そんな事してないよ。」

私の口調は和田さんに威圧されて遠慮がちになる。そして和田さんは、私の体を爪先から旋毛まで眺めてから言った。

「ま、まあ、あなたが怪我してないんだから京介先輩が怪我してる訳がないわよね、じゃ。」

和田さんは、さつさと、そして笑顔で、京介先輩の所へ行った。でもその前の言葉は、多分、和田さんなりの安堵の表し方なのだろうと、私には思えてならない。

こうして、私と京介先輩の遭難は終わった。その事実には私に、安堵と、ほんの少しの惜しみをもたらした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1448p/>

---

ハイキング同好会！

2011年10月8日01時20分発行